

I-B-8

当帰芍薬散による、切迫早産治療薬塩酸リトドリンの副作用軽減の試み

香川県立津田病院産婦人科、*徳島大学産婦人科

○鎌田正晴、前川正彦、高柳真、*青野敏博

目的 切迫早産治療薬塩酸リトドリンは、選択的 β 2刺激剤であり、循環器系への作用は弱い。しかし大量投与では、やはり動悸、頻脈など β 1作用が用量依存的に発現し、そのため有効量まで投与出来ない事も多い。 β 1作用によるそれらの症状は、更年期障害で見られる血管運動神経失調時の症状と同じと考えられ、同症の治療薬当帰芍薬散の併用による、それら副作用の軽減を試みた。

対象及び方法 1987年 4月以降に入院加療した切迫早産患者11例に塩酸リトドリンを静脈内投与するとともに、当帰芍薬散（津村順天堂）7.5g/日の経口投与を行った。塩酸リトドリンの静脈内投与のみを行った18例を対照とし臨床成績を比較検討した。切迫早産の重症度の判定はBaumgartenのtocolysis index(TI)を用いた。

成績 併用群のTIは4.2で、対照群の3.4に比しより重症であったが、投与中止や減量を余儀無くされる強い副作用の発現は、対照群では44.4%(8/18)に認められたのに対し、併用群では9.1%(1/11)と低率であった。また破水例を除いた2週間以上の妊娠延長成功例は、対照群の56.3%(9/16)に比し併用群で88.9%(8/9)と高率であった。

考察 対照群の失敗例は、50-150 μ g/分程度の塩酸リトドリン投与により120/分を越える頻脈、動悸、胸内苦悶等の強い副作用を示し、有効量を投与し得なかった例が多い。それに対し併用群では、著名な副作用の発現なしに500及び600 μ g/分という大量投与により妊娠延長に成功した症例もあり、当帰芍薬散併用による副作用の軽減化が高い妊娠延長成功率をもたらしたものと考えられる。さらに当帰芍薬散は子宮収縮抑制や利尿、血糖降下などの作用も有し、今回の成績とも併せ、 β 刺激剤との併用療法は、切迫早産の管理に有用な治療法として期待できる。

結論 切迫早産患者に対する当帰芍薬散の併用投与は、塩酸リトドリンの副作用を軽減することにより、その有効治療量までの投与を可能とし、高い妊娠延長成功率が得られることが示唆された。